



## 舞台裏 ～中将姫大会式～

毎年、5月14日に行われる得生寺の中将姫大会式。恒例行事として親しまれていますが、きらびやかなお渡りの舞台裏をみなさんご存知でしょうか？

今回、お渡りの二十五菩薩の前を歩く、和讃を唱える子どもたちの姿を追いました。



和讃の指導者さんたち  
左から  
伊藤 美恵子さん  
宮井 真由美さん  
三木 祐里さん

「指導をさせていただいて感じることはありませんか？」  
「伝統ある儀式を子どもたちにも関心をもってほしい、未来に引き継いでいってほしいです。」



子どもたちの和讃が響く中将姫大会式

広告



### 和讃とは？

一般には、諸仏、菩薩、高僧の徳や行跡を和文の詩形式で讃えたもので、七五調でつくられたものが多い。中将姫和讃は、得生寺に伝わる中将姫の伝説を唱えるものである。和讃を唱える際に、和讃の節回しに合わせ、リンを鳴らす。

←赤い房のついたリン

### 放課後の練習



リンを使って和讃の練習

「お堂に涼やかなリンの音と、子どもたちの唱える和讃が響いていきます。彼女たちは系我小学校の5年生と6年生。5月14日の会式に向け、4月から放課後の時間を、得生寺で練習を重ねてきました。」

「初めは、和讃の内容を暗記し、何も見ずに唱えられるようになってくると、和讃に合わせてリンを鳴らす練習をしてきたそうです。」

「長年和讃の練習の指導をしている方々にお話を聞きました。」

「どういった指導されていますか？」

「伝統ある儀式を子どもたちにも関心をもってほしい、未来に引き継いでいってほしいです。」

「指導をさせていただいて感じることはありませんか？」

「子どもとふれあえる良い機会になりますね。また、5年生で参加した子が一年後6年生として来たときにすこく成長を感じます。」

**いよいよ本番**  
境内にたくさんのお客さんがつめける中、お渡りが始まりました。紫色の着物に身を包み、凜とした表情で、みんなの声をひとつに、今まで練習してきた和讃を唱えていました。

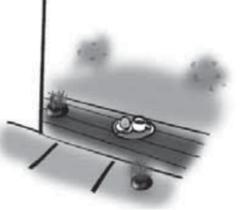
「系我の昔から受け継がれてきている伝統ある行事に系我に住む自分も関わることができてよかったです」と話していました。

伝統ある文化はたくさんの方の協力と努力があって、未来へ受け継がれています。

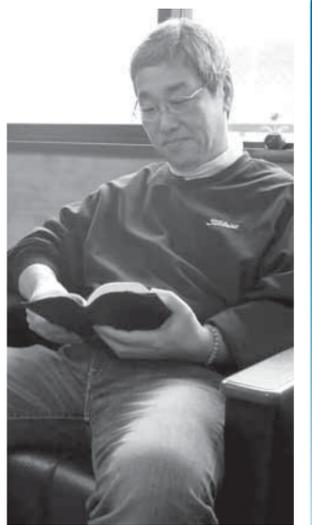
# 龍谷大学生 持ち込み企画 有田市 縁側発見新聞 No.02

前月号から始まったこのコーナーは、地域の課題解決について研究し、有田市においてフィールドワークなどの活動を行っている龍谷大学の学生のみなさんが取材しました。

“ホッとできる自分の居場所”を“縁側”と名づけ、その魅力を多くの人に伝えるため、学生に記事を書いてもらい、連載しています。今回は第2弾です。



## オレンジ色の絶景



この春定年退職した  
大中 真人さん  
(60)  
初島町在住

職場である市役所の始まりは朝の八時半。しかし、大中真人さんの朝は、八時、執務室の一番奥に佇むソファから始まる。彼はここで毎朝、ありとあらゆる本を読むのである。

始まりは、小学校の頃に買ったもらったシャーロック・ホームズ全巻。もう久しく読んでいないけれど、今でも捨てられないと懐かしむ大中さん。ここから大中さんの読書人生は始まる。歴史や文化財関連の本が特に好きだが、ジャンルを問わず年間100冊の本を読む。大中さんの次から次へと溢れる魅力的なお話、知識、人柄がこの読書人生を物語っていた。

そんな大中さんはこの春、40年間働いた職場を定年退職された。

水産関連の職場に配属されていた頃、大中さんは地元の漁師さんからおもしろい話を聞いた。

有田市を流れる、二級河川である有田川。夕方、有田大橋からその有田川を前に西の方角に顔を向ける。すると大きな夕日がちょうど有田川の河口に真っ直ぐ沈んでいくという。お彼岸の頃にしか見られない貴重な景色、有田川と大きな夕日がびったりマッチする絶景に感動したと話す大中さん。

長年有田市に住んでいても知らなかった、地元の漁師さんだからこそ知っている景色。今でもお彼岸の時期になると、この夕日思い出す。

40年間有田市で働き、たくさんの人と出会った大中さんの胸には他にも素敵な縁側があるかもしれない。



有田大橋からのぞむ有田川河口

取材を終えて・・・

実際にお話を聞き、記事を作る中で難しさと責任を実感したと同時に、市外の目から見た有田市の魅力を少しでも発信できればという想いが強くなりました。

お話を聞く中で、有田市が好きなことが伝わってきたので、これからの色々々方のお話から有田市の魅力を引き出し、いけたらと思います。

左から順に  
野口裕加・宮田滯・矢野凌祐・押谷千咲

広告

